

加堂秀三

北山しぐれ



角川書店

加堂秀三

北山しぐれ



角川書店

北山しぐれ



昭和五十一年十月三十日 初版発行

加堂 秀三

発行者 角川春樹

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二一十三—三

電話（東京）二六五—七一一（大代表）

郵便番号〇三 振替東京三二五三〇八

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 大口製本株式会社

Printed in Japan

0093-872172-0946(0)

北山しぐれ……………目次

序章

面影

七

第一章

風の街

七

第二章

旅立ち

八

第三章

禁忌

三

第四章

るつぼ

— 二三 —

終章

なりひら竹

— 二七 —

あとがき

— 二五 —

装画 装幀

橋本 山岡

潔 茂

北山しぐれ





序章  
面影



## 1

そんなことをいっても誰もほんとうになどしてはいないのを承知のうえで、男はひとまわり年上の女と、清荒神きよこうじんの山のとつきに、鄙ひなびた紅葉や京仕立ての松、それに、こんなところになんかものがあるかと思ふくらい年代物の、織部燈籠などを並べ、ひとに間柄を問われると、どこまでも甥お・伯母おばですといひ張って暮らしていた。

男は、或る日ごく慇懃いんぎんな様子で訪ねてきた巡査に、仕方なく実家のことその他、必要最低限度の話をしたほか、減多に客には自分の名も名乗らなかった。

土地のひとの噂によると男の年齢としは、どう幅を持たせて見たてても、二十七より若いということはないだろうし、三十三より老おけていることもないだろうということになっていた。

もっとも、この年齢の推定は、土地のひとの噂そのものというより、ここ半年ほどの間に、噂の多さでは宝塚へ通う女優のタマゴたちを差し置いて、まず土地第一番かと思われる果報かほう者になったこの男の、それこそ星の数ほどある噂のなかから、偶然の機会に当の男の耳まで届いた、これはまた数の少ない噂のなかのひとつにすぎなかった。

年齢の推定に関するこの噂について話し合ったとき、今年ちょうど二十九になる男は、土

間で地下足袋のコハゼをはずしながら、

「……世間って、……怖いな」

と、低い、囁<sup>ささ</sup>れた、（女にいわせるとふるえのくるほどセクシュアルだという）声でそう呟いた。そして女から真っ白いタオルと、女の好みでいつも切れたことのない、フランス製の石鹸とを受けとって、つい一ト月ほどまえに二間きりの住いへ継ぎ足して建てたばかりの、ひどく狭苦しい風呂場へ入って行った。

上物<sup>じやうもの</sup>とはいえ数の少なすぎる売り物の植木や、棟割り長屋の姉<sup>あね</sup>さんのようなこの住いなどと、ゲランだかランバンだかの香り高い石鹸とは、ちょっと不似合いなようであったが、その不似合いな生活を許しているのは、女のもとの夫から、月月決って振りこまれる秘密な金で、男も金の秘密をうすうす知っていたから、女にいい石鹸やウイルキンソンのカミソリなんかをあてがわれるたびに、複雑な気持にならずにはいられなかった。

いまでも男は湯気のなかで、一日の力仕事のためにずいぶん匂いの強くなっている軀を洗いながら、宇治のほうに住む、女の夫の顔や声进行だし、息苦しいような気持になった。

風呂からでると、そこが住いと風呂場との繋ぎ場所になっている台所の板間に、夕化粧とのか何というのか、うっすら白粉<sup>せしろうい</sup>をつけた女が、きっちり折り畳んだ男の着物や襦袢、兵児帯などのうえへ、おろしたてのように白いブリーフをのせて、両手でささげるようにし

で持ち、しっとり濡れた眼をして立っていた。

女は着物姿で、軀からすると小さな足の、真っ白い足袋のさがが、拭きこんであるとはいうものの、もともとが木の粗末な床に、痛ましいくらい美しく映えていた。

男はさかんに湯気のたちのぼる裸体のまま、頸などの長目な女と向きあって立ち、自分なぜ妻も働き場所もみな失うことになるのを承知のうえで、なおかつこの女の軀にのめりこんで行かずにはいられなかったか、いまはよくわかる、ほんとうにわかる……と、なにも今夜にかぎらず、何度も何度も思い知らされていることを、また考えた。そして子供扱いなんかされるには、少し藪がたちすぎているし、軀なんかもいかつ威いくらい雄雄しく逞しいのに、やがて女にブリーフを穿かせてもらい、なにげないふうをして股間などにも手を触れられ、あとは手早く肌襦袢を着せかけられた。

二、三本の銚子をゆっくりとあける夕食がすむと、二人は、二間きりしかない住いの、広いほうの部屋へ入って行き、夜ごとのことなのにひどく焦って、互いに互いの帯や紐へ手をかけた。

その新しあらたや不意打ちを競う二人の耳に、風の向きによってはたいそう近く、阪急電車の音や駅の放送なんかが聞こえてきた。

「日中はまだ秋やけど……」

「はあ！」

「朝晩はもう冬や」

「ほんま！」

「腹はへるし火は恋しいし、忙しい！」

「忙しいわ！」

掛け合い漫才のように土地のひとびとがいい合う時候になってから、或る午後京都のほうに住む男の祖父が、伸したときでも曲っている腰のところへ手拭をさげて、男と女の侘住いまでやってきた。そして先代からの施主にあたる家柄の、ひょんなことから孫の相方になった女へ、くどいほど頭をさげて挨拶をしてから、さげてきた唐草模様の風呂敷包みを解き、千丸屋の湯葉だの七味家の唐辛子だの、それに鶴屋八幡の柚餅だのというものを、こてこてと取りだした。

「まあ、懐しいものばかり！」

世田谷あたりの生れだという女が、鮮やかな東京言葉でそういつて、こんな暮らしに入っ

てからも見捨てずにいる茶釜のほうへ立っていくと、老人は、ふと思いついたように、

「昨日<sup>きの</sup>なア、清滝のほうへ仕事にいったん」

と正座などすると飛びきり腿の高くなる孫へ言葉をかけた。

「ほな、えらい似たひとが、犬連れて歩いたはってなア、もう、びっくりしてしもた」

祖父は昨日清滝で、誰に似たひとを見かけたのか、何も具体的にはいわなかったが、老人が薄茶なんかをふるまわれて帰って行ってからも、その言葉は、男と女の耳に、重く残った。

「明日あたり、行ってみましょうか。清滝へ……」

夜がふけてから女が寢床で、男のいいだしかねていることへ水をむけた。

男は身じろぎもなかった。

灯を暗くしても白く見えるシーツへ、小黒い真裸の軀を仰臥させたままであった。

女が眼をこらすようにして見ると、その小黒い軀にひとときわ黒く、ハッとするほど濃い乳暈や、腋毛が見えた。

暗がりで見開いている眼も暗かった。

世間のひとにどう映ろうとも、女にとってはかけがえのない、間夫<sup>まぶ</sup>の裸体であった。

「ねえ、行ってみましょうよ」

と女はつづけた。



男の妻が行方不明になってから、一年半ほどの月日が流れていた。

無論その出奔の遠因になったのは、男と女の情事で、二人はいつもいつも、男の妻の話がでると、女の夫のことが話題になるとき同様、愛しあう筈の寢床で、互いに互いをしいたげるような遊戯にふけらずにはいらなかった。

今夜も男はもう電気ストーブなどつけてある寢室で、たいそう荒く振舞った。

女は表面その男の荒さを恐れてみせながら、じつはそこにあらわれる、比類ない若さの気配を喜んだ。

男が妻や仕事を捨てて購<sup>あがな</sup>ったの同様、女も夫や富裕な生活を見かぎって手に入れた、いとしい男の若さであった。

その若さは、女が恥かしくて見せたり辛がって見せたりしてそそればそそれるほど猛猛しい、際限のないものになって行った。

またそれは、回復力も早かった。

さながら若者が何人も何人もいて、交互に女へ立向ってくるかと思えるほどであった。

女は全身を水でも浴びたような汗に漬けて、喜んだ。

「あら、あら」

といって、男が女をからかった。